

成果報告書

記入日 2017 年 04 月 09 日

氏名 中野隆基	渡航先国名 ボリビア	所属機関 ガブリエル・レネ・モレノ自治大学歴史博物館
研究テーマ：ベシロ語の生成と変遷に関する言語人類学的研究：ボリビア東部低地の歴史と現在		
研究期間：2015 年 4 月～2017 年 3 月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>報告者はボリビアのチキタニア地方に赴き、先住民言語ベシロ語の生成と変遷を明らかにするための現地調査を行った。その過程で、植民地時代のイエズス会の政策を契機に成立してきたベシロ語と先住民チキタノは、宗教・教育・政治の領域を通して現在新たな局面を迎えていることが明らかとなった。このことは、当初の研究により深みを与えるだろう「諸領域の絡まり合いの中でのベシロ語の生成と変遷」という新たな課題の発見にもつながった。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>報告者はボリビアのサンタ・クルス県にあるガブリエル・レネ・モレノ大学附属歴史博物館歴史学人類学研究センターに客員研究員として所属し、調査地であるチキタニア地方のサン・イグナシオ市とコンセプション市に2年間住み込み、「先住民言語ベシロ語の生成と変遷」というテーマで現地調査を行った。調査開始当初の主な関心は、史料の検討と現在の宗教的領域の調査からベシロ語の通時的な連続と断絶を明らかにしようとするものであった。しかし、現地に住み込んで調査を続けるうち、「ベシロ語の生成と変遷」を問うには、宗教的領域は政治的領域や教育的領域と重なり合っていること、そしてその絡まり合いの中で生成するベシロ語の在り方を問うことが必要であることに気付いた。</p> <p>以上を踏まえ、報告者の研究結果を（1）留学の目的、（2）研究の方法、（3）研究の成果に大別し、順に述べていく。</p> <p>（1）留学の目的</p> <p>報告者は留学開始前、ベシロ語が「言語」でありその使用者としてのチキタノが「民族」であるという認識自体、植民地時代のイエズス会による先住民集住政策と言語政策を契機として形成されたものである、という着想を先行研究から得ていた。この着想から、当初の留学の目的を、史料・参与観察・聞き取りから得たデータの分析を通して、ベシロ語の使用形態とその宗教的あるいはジェンダー的な規範の関係を問い、ベシロ語の生成と変遷を問うこととして設定した。</p> <p>ところが実際に渡航し調査を開始してみると、「ベシロ語の生成と変遷」というテーマは宗教的な領域だけでなく他の様々な領域における言語使用（コミュニケーション）とも深くかかわっていることが明らかとなった。たとえば、当初の問題意識の一つであった①ベシロ語の歴史的混淆性に関しては、ボリビア共和国成立後の主に1955年以降、夏季言語研究所や先住民組織、活動家や言語学者、話者の間でもスペイン語からの借用語の有無や「脱植民地化」された新たなベシロ語の書記法の確立など、様々な議論と実践が現在まで当地で重ねられてきていること、そして教育的領域において現在普及モデルとして設定されているベシロ語は、ある特定地域の変種であり、その選定には先住民組織で発言力を持つ人々が当該地域出身の話者であるという政治的背景がある、とされていることも</p>		

明らかとなった。そのうえ調査の過程で、教育的領域におけるベシロ語の普及実践自体がチキタニア地方内部のベシロ語の地域的・口語的多様性を各地域の住民に喚起させていることを報告者は目の当たりにすることになった。以上より、①ベシロ語の歴史的混淆性という問題を考えるには、スペイン語とベシロ語の対立や混淆だけでなく、ベシロ語内部の対立や混淆の有無とその正書法の確立の過程（とそれに伴う諸困難）を明らかにすること、そしてそのためには宗教だけでなく教育や政治といった領域にも目を配ることが必要であると考えに至った。

上に述べたことは、②ベシロ語の性別指標を中心とした文法構造と語用論的差異の問題という当初のもう一つの問題意識とも関係している。報告者は、2016年2月の謝肉祭で、ある男性教師が自身のパソコンで作成したベシロ語の原稿を片手に「説教」と呼ばれる儀礼的発話を行う場面の参与観察を行った。この参与観察を行った旧イエズス会ミッションのコンセプション市では、男性教師が担当する以前、謝肉祭で説教を行っていたのはベシロ語を第一言語とする高齢の男性達であり、口頭あるいは手書きノートで朗読していた。男性教師は先に述べた政治的発言力の強いロメリーオ地域出身で、また教師という立場上「脱植民地化」を志向したスペイン語の排斥に積極的であり、前任者たちのベシロ語の説教の文面からスペイン語混じりの語彙を排除し作成した「正しいベシロ語」の説教テキストを基に、謝肉祭の儀礼的発話を行った。更に、説教は男性指標を伴う発話であり、今回も担ったのはこの男性教師である。ここからは、男性／女性という差異だけでなく、口頭／識字やベシロ語／スペイン語という差異の生成過程やその歴史的混淆過程、そして教育を通して制度化された脱植民地化というイデオロギーの役割を理解することが、カトリック行事の謝肉祭で重要なベシロ語の「説教」という発話ジャンルを理解するために重要なことが分かる。このように、宗教的領域でさえ教育や政治（先住民運動とその帰結としてのベシロ語教育政策）といった別の領域と重なり合いつつベシロ語のコミュニケーションが展開していることに、報告者は関心を持った。

以上述べた経緯から報告者の問題意識は深まり、本研究の目的は「ベシロ語の生成と変遷を諸領域（宗教・教育・政治）に注視しながら史料・参与観察・聞き取りから問う」というものに発展するに至った。

（2）研究の方法

調査過程で発展した研究目的を遂行するためには、研究方法の再検討も必要であった。既述のように、当初想定していた主な研究方法は、史料と宗教的領域において観察されるベシロ語観と使用状況の実態把握であった。こうすることで、ベシロ語の通時的な連続と断絶を明らかにしようとしたのである。そのため、留学開始時は人口約5万人を有するサン・イグナシオ市に住み込み、適宜史料を集めながら、カトリック教会のミサや祭りを組織化する役割を担う地元典礼組織カビルドの人々の活動に参加させてもらうことから始めた。これは、先に述べた「説教」というベシロ語の儀礼的発話を祭事に行うのはカビルドに参加するメンバーであり、その「説教」は現在の宗教的領域における重要なベシロ語の使用形態だったためである。報告者はサン・イグナシオ市でアパートの一室を借りて住み込みをしながら、主日ミサの後にあるカビルドの会合や彼らが組織する祭りに参加し、ベシロ語を含む言語使用の状況を観察した。その際、必要に応じてビデオカメラで撮影、ICレコーダーで録音することもあったが、基本的には参与観察を行い帰宅後に日誌を付けていた。しかし、調査の過程で、「説教」を担っているカビルドのメンバーには高齢者だけでなく、報告者と同年代（つまり20代から30代初頭）の若者も参加していることが分かった。中でも報告者の興味を惹いたのは、「説教」を行いつつベシロ語の教師を地元の初等学校で勤めている若者だった。彼はベシロ語を用いて宗教的領域と教育的領域を架橋していたのである。

サン・イグナシオ市の調査の過程で、報告者は宗教的領域と重なる領域として国によるベシロ語政策の過程に興味を持ち、その中心地であるコンセプション市で「ベシロ語を知っている」とベシロ語政策機関で紹介されたチキタノの家庭の部屋を間借りしつつ、サン・イグナシオ市とビザ手続きのための県都サンタ・クルス市とで往復生活

をしながら、住み込みで調査を始めた。家庭では大家でありベシロ語の教師でもある男性とその妻に適宜ベシロ語を教えてもらいつつ、同時に彼の経営する学校や家の近隣にある学校のベシロ語授業の録画撮影を含む参与観察や、ベシロ語政策機関が組織した地元教師と大学の言語学者によるベシロ語教科書検討会議の参与観察、祭りなどのカトリック行事、市による公共行事の参与観察、ベシロ語政策機関担当者や既述の言語学者へのインタビュー、そして適宜史料・資料収集を行い、当地の言語使用状況の歴史と現在を調査していった。その際、サン・イグナシオ市での調査経験が言語使用状況に関する地域的な比較の視点を補うことにもなった。このように、報告者の方法は宗教的領域だけでなく教育的・政治的領域を対象に含んだものへと発展していった。

(3) 研究の成果

以上述べてきた目的・方法をもって報告者は現地で調査を進めた。その過程では、宗教・政治・教育といったコミュニケーションの諸領域が重なり合い、新たなベシロ語生成の場となっていることが明らかとなった。それは既に述べたような、書記法や語彙の刷新と統一を通して「脱植民地化」した新たなベシロ語が確立するまでの歴史的過程や、現代の宗教的領域におけるベシロ語の「説教」の例を見れば明らかであろう。その意味では、現地調査を通して自身の研究目的と方法を発展させ、今後の課題につなげられたこと自体が、本留学全体における成果だったと言える。

植民地時代より歴史的に混淆的な過程を経てきたベシロ語は、現代において新たな局面を迎えている。契機となるのは先住民の権利向上を掲げる新たな教育制度の確立と実践である。新たな教育制度のもと、先住民言語を標準化・書記化し、その学習を学校の生徒だけでなく一般労働者や公務員にも権利化・義務化することで、特にスペイン語とそのモノリンガルに対して言語的不均衡の是正を行い、「脱植民地化」された多文化主義や多言語主義を国全体で達成しようという考えが確立され、その実践が目指されている。しかし、この先住民言語政策を施行する政府に反対する野党が市政を握るコンセプション市では、職員は一人として先住民言語のコースを受講しておらず、政党争いが政策の障壁となっている（業績2で発表）。更に、第一言語がスペイン語である生徒にスペイン語で教授せねばならないベシロ語教師たちは、その翻訳・教授の過程でベシロ語にある包含的一人称複数形を無意識的に消去して生徒に教えたり、逆にベシロ語にはない数詞を新義語として発明して生徒に教えるなど、実践上の困難を伴いながらベシロ語を教授している（一部業績1で発表）。また近年、書記言語として統一されたベシロ語は、地域変種の分布に応じて口頭では該当の各地域変種で読み上げる、という指導方針が決定された。以上の現象は、政府支持者と野党支持者、話者世代と学習者をはじめとする様々な差異が今後ベシロ語政策の実践を通して形成されていく可能性を示している。また、地域の社会文化的文脈をくみ取りつつベシロ語政策を実践していくことも教育制度によって義務付けられており、既述の「説教」といった宗教的領域はますます無関係ではなくなるだろう。今後の課題は、このように諸領域が絡まり合ったベシロ語の新たな局面を民族誌的に記述しつつ、「脱植民地化」によって消去された言語観や言語的特徴を史料や文献・聞き取りで得たデータの分析から明らかにしたうえで、両者の関係を問うことである。そうすることで、ベシロ語の通時的な連続と断絶を明らかにしていきたい。

研究業績

(1) NAKANO, Ryuki (2016) “¿Conflictos o diálogos?: Un informe sobre el proceso actual de la Educación Intercultural Bilingüe del pueblo indígena chiquitano en la región Chiquitania, Bolivia”, *Perspectivas Latinoamericanas*, Centro de Estudios Latinoamericanos Universidad Nanzan, 13: 185-198. (「コンフリクトか対話か? : ポリビア、チキタニア地方における先住民チキタノの異文化間二言語教育の現状に関する報告」、『*Perspectivas Latinoamericanas*』、南山大学ラテンアメリカ研究センター、13: 185-198、スペイン語査読あり論文)

(2) 中野隆基(2017)「多言語政策を通じた集団間関係の形成をめぐって：ポリビア東部低地チキタニア地方におけるベシロ語教育政策と政党争いの分析から」社会言語科学会第39回大会、於：杏林大学、2017年3月18日。(国内査読あり口頭発表)

留学中の生活・研究でのトピックス

報告者は留学中、住み込みならではの様々な人間関係に触れることができた。例えば、留学開始当初に住み込んだサン・イグナシオ市ではアパートの一室を借りうけ、地元典礼組織カビルドのカトリック実践に参加させてもらっていたが、そこでは「チチャ」と呼ばれるトウモロコシを発酵させた飲み物や、祝祭時に皆に食振舞われる食事、そして輪になって回る踊りなど、当地の社会関係を形成する重要な契機に触れることができた。報告者を受け入れてくれたカビルドの人々に、この場を借りて感謝の意を示したい。



コンセプション市のステイ先の庭にある生活用水のための井戸



コンセプション市のステイ先の家の庭で夜間、木に登る鶏たち

また、コンセプション市ではベシロ語を通してさまざまな人間関係に触れることができた。そもそも報告者がベシロ語教師の男性宅に住むことになったのも、ベシロ語政策機関で「誰かベシロ語を話すことができ、間借り可能な部屋を持っている人を知らないか」と報告者が尋ねて紹介してもらったことがきっかけであった。また、男性とその妻は偶然（あるいは必然だったのかもしれないが）話者の大多数が集中し、ベシロ語政策の中心的役割を担ってきたロメリーオ地域出身者である一方、政府のベシロ語政策には批判的であったため、当地のベシロ語政策の宗教・教育・政治的背景を含む現地の生活全般について、政府見解ではないまた別の見解を教えてくれた。男性の妻はベシロ語や現地の料理を振舞ってくれ、男性の娘は家での良き話し相手になってくれ、また飼育されていた動物たち（鶏、猫、犬など）は普段の生活に賑わいを与えてくれたおかげで、楽しい留学生活を送ることができた。調査先の学校教師陣や生徒たち、途中で知り合った言語学者とも、調査を含め非常に有意義な時間を過ごさせてもらった。渡航先で出会った皆に感謝の意を示したい。

最後に、本留学を可能にしてくださった松下幸之助記念財団のみなさま、そして審査員の先生方に深く感謝の意を示したい。留学開始前から留学終了までに頂いた温かい激励の言葉や調査のアドバイス等は、留学しているあいだ常に頭の中にあっただろう。深く感謝したい。

今後の社会貢献

まず、二年間の留学を通して得た知見をもとに、今後もベシロ語の生成と変遷に関する研究を続け、その成果を学術的に広く発信し、博士論文を執筆したい。必要に応じて現地調査を続けつつ、日本語・スペイン語・英語での論文執筆や学会発表を通して成果を公表することで研究者ネットワークを国内外問わず広げ、理論研究や他地域との比較も行ったうえで博士論文を執筆することを目指す。以上を通して、文化や言語の複数性の容認と調和が日常的な場面から国家間の交渉まで様々な水準で求められている今日の国際社会に対し、そのような複数性が生成する過程そのものに着目する重要性を提示することで、国家間のそして国家内の異文化相互理解を深めるための視座を提供したい。

次に、ボリビアで調査に協力してくれた人々に成果の還元を行いたい。本来は帰国前に得たデータをもとに報告書や論文をスペイン語とベシロ語で手渡す予定が、今回は結局渡せないまま留学が終わってしまった。ベシロ語政策はまだ開始したばかりで試行錯誤の状態にあり、また政党争いという政治的背景も障壁として存在するからこそ、調査対象社会への学術的な成果還元は意味があると信じ、今後は可能な範囲で行っていきたい。